

若者への学び直し支援の実際

釧路自主夜間中学「くるかい」の現場から

添田祥史

要約 本稿は、リテラシー概念を手掛かりに、ひとりの若者の学び直しのプロセスを記述したものである。小学校3年生から不登校で心も身体も固まった状態だった彼が、今では高校に進学し、アルバイトも経験し未来に希望を語る。その軌跡を本人の語りや筆者の観察記録等をもとに再現していった。その作業を通して、学び直し支援を考える際、リテラシーの運用能力を「適正值」に引き上げるという発想では不十分であり、リテラシーの再習得支援を媒介にした関係の編み直しとして捉えることの重要性が見えてきた。

1 問題の所在

東京都の公立夜間中学校を丹念に描いた記録映画『こんばんは』（森康行監督、2003年公開）に、シンちゃんという若者が登場する。小学校から不登校だった彼は、誰とも一言も話さない。話すことができない。心も身体もがちがちに固まってしまっている。そういう彼が、年齢も国籍も様々な学友たちや人間味あふれる教師に囲まれながら、ゆっくり自分を取り戻していく。

この記録映画は、学び直し支援に関わる関係者に対して、新たな課題を投げかけた。夜間中学⁽¹⁾の文集や実践記録には、若者自身が執筆した作文やスタッフによる若年学習者の成長や変化について綴った文章を目にすることができる⁽²⁾。しかし、若者に焦点づけ、その学びの軌跡を丹念に検証していく作業は、ほとんど手付かずであったといえる⁽³⁾。それは、研究においても同様であった。夜間中学の「日常」を描いていく論稿は、いずれも高齢学習者を中心に描いたものであった（添田2008、岩崎2008）。

そうした中で、井上大樹（2011）による研究は先駆的である。井上は、夜間中学を卒業し、

現在はそのOB・OGによる学習サークルの代表を務める20代半ばの女性の学習過程を「学びによる癒し」「学びの社会化」「学びの自主化」という三つの様相から捉える。自らも当該実践に深く関与してきた井上の分析は、現場に裏打ちされた説得力をもつ。

しかし、このことは、私たちが普遍的に妥当する真理・法則性を有する「解」を手に入れたことを意味しない。そうした考えは、かえって視野を狭くし、実践を硬直化させる。ケースを共有していく意義は、「特定の現場（ローカリティ）において、当面、成立可能で受容可能な解」（矢守2010）を蓄積していくことによって、支援実践のヴァリエーションを豊かにすることにある⁽⁴⁾。本稿では、そうした視座に立ち、筆者が関わる学び直し支援実践の現場のドラマを記述していくことにしたい。

筆者が設立と運営に携わってきた釧路自主夜間中学「くるかい」（以下、「くるかい」）は、2009年5月開設以来、毎週1回の活動を継続している。学習内容は、市販のドリル等を活用した小中学校の教科学習の学び直しが主であるが、成人が釧路で生活していくことを意識した

オリジナルの教材開発にも努めている。教科ごとにグループをつくり、マンツーマン形式に近いカタチで学習をサポートする。2013年7月現在で、学習者26名、スタッフ29名が登録している（実質参加者はその7割程度）。

本稿では、そこに集う一人の若者の学び直しの軌跡を紹介したい。「くるかい」にとって、彼に対する支援実践は一つの到達点であり、今後の指標となる事例といえるからである⁽⁵⁾。学び直し実践全体において本稿は、カリキュラムが未整備で、非専門家による支援実践の事例研究として位置づく。

2 本稿の課題と方法

山口純くん（10代後半・男性）が初めて、「くるかい」に参加したのは、今から4年前、まだ中学校在籍中の秋だった。小学校3年生から不登校の彼は、スタッフの誰が話かけてもほとんど反応がない。表情がなく、心も身体も完全に閉ざしている印象だった。大勢の中に身を置くことは難しいとの判断から、母親同伴で別室での学習からスタートした。

当時、彼は自宅の住所を書けなかった。漢字は小学校3年生程度であり、基礎的な計算問題が解けなかった。英語はアルファベットもマスターできていない。彼の生活スキルも、同じように不登校になった時から止まったままだった。バスも一人では利用できない。欲しい商品が見つからなくても店員さんに尋ねることができなかった。そんな彼が、今では、通信制高校に通い、飲食店の厨房でのアルバイトも経験している。「今の僕は、一年後の僕の成長を見るのが楽しみです」（文集第4集、資料5）と綴る「今」の彼は、どのように形づくられてきたのか。そのプロセスに学び直し支援はどう関わってきたのか。

「くるかい」では、教科学習の学び直しを軸としながらも、学力充足のみを最終目標としているのではない。当人の生活を励まし、豊かにするような学びこそが目指されている。彼の学びの軌跡を追うには、学力という指標では不十分である。そこで本稿では、リテラシーという概念に着目する。リテラシーとは、読み書き算を中心としながらも、成人が生きていく上で必要な知識や技能とのその習得をさす膨らみをもった概念であり、ユネスコ国際専門家会議では、次のような定義が試みられている（上杉2013）。「リテラシーは、多様な文脈と結びついた、印刷されたり、書かれた資料を用いて、自己を位置づけ、理解し、解釈し、創造し、コミュニケーションを交わし、コンピューターを用いる能力である。リテラシーは、個人が目標を達成し、知識や潜在能力を伸ばし、地域やより広い社会に十分参加することができるような一連の学習を含む」。

以上をふまえて、本稿は、「くるかい」での学び直し支援が、純くんにどのようなリテラシーの獲得を促し、それによって、彼の生活世界や自己形成はどのような影響をうけたのかを明らかにしていくことを課題とする。ただし、こうした課題設定は、純くんの学びの軌跡を出来あいのストーリーに収斂させたいという誘惑にかられてしまうことに注意が必要である。そこで、本稿では、一見上記のリテラシー概念に関連しないような部分であっても、彼の「今」につながるとされる部分は記述していくよう心掛けることにしたい。

こうした課題意識のもとで、筆者は純くんと彼の学びの軌跡を共同でふり返る作業を行った。具体的には、「くるかい」の文集に彼が寄せた作文を探究のきっかけとして使用した。「くるかい」にとって文集の作文執筆は、一年をふりかえる大事な作業として位置づく。純くんは、

文集創刊号から最新号である第4号まで毎年作文を書いている。それを書いた当時の気持ちとその前後の生活とリテラシーの状況について語ってもらい、筆者はそれを純くんに見えるかたちでノートにメモしながら確認していった⁽⁶⁾。

対話は、ICレコーダーで録音することを事前に了承してもらって、後日そのメモを見ながら聞き返せるようにした。以降の分析作業にあたっては、筆者単独で行った。純くんと共同で行ったふりかえりのデータからリテラシーの変容過程と生活世界の変容過程の関連を対照表としてまとめた（資料1）。

時期	日常生活	リテラシー実践（「くるかい」含む）
2010年 第1集 （1年目） 15歳	・母親に連れられて9月入会。 ・別室で学習。スタッフに話しかけられて一言返事するのがやっと。 ・小学校3年生から不登校。 ・外出は本屋で立ち読みくらい。 ・欲しい商品が見つからなくても、店員に尋ねることができないので、「ないと決める」。 ・自宅の住所を書かなくても暮らしに困る程度の世界。 ・バスに乗れない。 ・長机が一人で持てない。 ・母親が「仮面ライダー」を録画。観てみると面白かった。兄もはまる。 ・ベアの担当者と「仮面ライダー」の映画を観に行くことに。現地集合。 ・バスに初挑戦。事前の下見では路線を間違え、運転手さんに話しかけた。 ・店員に話しかけられるように。 ・「（自宅で）漢字をやたらして」毎日2時間。2〜3ヶ月でノート1冊を終えるほどの学終量。 ・散歩に出かけるようになる。 ・「きっかけは登山。歩くのが楽しい。木とかよく見るときれいだなって、自宅でも2ヶ月、おいは筋トレ」。	・文集の意味がわからない。 ・1年目の作文は「漢字がきたない」。 ・参加2週目から成澤とベア。 ・漢字は小学校3年生程度。 ・ライトノベルが好きでよく読む。 ・算数は基礎的な計算問題が解けない。 ・英語はアルファベットもできない。 ・バスの整理券の意味がわからない。 ・他者と会話することが「めんどくさい」。 ・ベアの担当者ととは会話が成立するようになる。きっかけは「<u>仮面ライダー</u>」って知ってる？」「いきなりなんだこいつ。バカか」と思うも、いっつ、「面白かった」と伝えと場面ごとの感想を求められる。 ・ベアのスタッフが「<u>漢字のテスト</u>」を作ってきた。「（せつかく作ってきくてるんで）しょうがないからやるか」結果、点数があまりよくなかった。 ・自宅での勉強後、<u>再びテスト</u>。（点数は）「わりによかった」。 ・「くるかい」で有志参加の<u>登山</u>に参加。<u>くるかい</u>の学習中にベアのスタッフが<u>筋トレ</u>を薦めてきた。「きいてないのにやらされて。勉強しにきたのにいきなり筋トレ」と思いながらも。
第2集 （2年目） 15〜16歳	・長机がもてるようになった。 ・「ある日<u>ネット</u>が<u>英語</u>が目に入り、何と書いているのか気になる。（文集作文）友だちの薦めの<u>音楽</u>の歌詞も知りたい。 ・散歩で歩ける距離が増えた。	・2年目の文集は、「字が整ってきた。濃くなってきた（筆圧が高まった）」。 ・「英語をはじめからちゃんと勉強したいと思ひ成澤先生におしえてもらいながら一生懸命勉強しています」（文集第2集の作文より） ・二度目の「くるかい」有志の登山。

資料1 純くんのリテラシーと生活世界の対照表（一部）

この資料を軸としつつ、入会時にスタッフが行った面談記録や筆者によるこれまでの活動記録と重ねながら彼の学びの軌跡を再現していった。

3 純くんのリテラシーと生活世界の拡がり

1 参加当初のようすと1年目の変化

純くんは、小学校3年生から不登校で、6年生の一時期登校できていたこともあったが、担任が代わりまた通えなくなった。中学校の門は一度もくぐっていない。市の教育研究センターや在籍校からの紹介で、母親に連れられて来た⁽⁷⁾。母親から「最近、本人は、少しずつこれからのことを考えているようで、それを一緒に考えてくれる人が必要」なので、「勉強は少しリードしてくれるような男の人をお願いしたい」（面談記録）との要望があったので、男子学生が担当することになった。

参加当初の純くんは、心も身体もがちがちに固まらせていた。スタッフの誰が話しかけても、ほとんど反応がなかった。一言返事をしてくればよいほうで、会話が成立しない。かといって、まったく外の世界と関係を閉じていたかというとはそうではなく、「周りの声や物音に過敏に反応していた」（面談記録）。そこで、いきなり大勢の中に身を置くのではなく、別室を設けて、母親同伴で学習を開始することにした。

資料2は、1年目の文集で、参加半年後に書かれたものである。「作文」というタイトルのこの文章は、よく見ると二部構成になっている。「私がきたきっかけはだまされてきました おいしいものを食べに行くといわれてきたらここでした」と綴っている箇所は、純くんの筆跡である。現在の純くんに1年目の文集を見てもらったところ、「漢字がきたない」「バランスの悪い」という感想だった。当時、彼は、自宅の住所さえ漢字で書けなかった。ライトノベルという分野の物語小説を好んで読んでいたが、文字を書くという行為は生活の中から欠落していた。そうした状況にあって、ようやく書いたのが先の

イ作女 名前

私が「まださっかかけはだ」まで来て
きました。おもしろいもの食べに行くと
いわれてきたらゴメンです。

Q どんな気分でしたか? デザートの後、申月が「そ
やええ」と言ったときよりなかに「す
Q はい、はい。 Yes NO
食べたいと思いましたか? 食べたいとは思いませんでしたか?

Q 中絶 豆乳、白
菓子は、白

一文である。

純くんの文章を受けたかたちで後半はQ&A形式で短いやりとりが続く。ここには、純くんと男子学生の関係性がにじみでている。純くんの気持ちを引き出し文章として残す作業をなんとか成立させたいという男子学生、それを冗談めかしながらも、きちんと受け止め応えようとする純くん。こうした関係性が、純くんに筆をとらせたといってよい。

純くんに文集執筆を呼びかけたのは筆者であるが、時期尚早だろうと考えていたので当初は見送るつもりだった。しかし、すでに母親の付き添いはなくなり、休憩時間には、メインの会場にお茶を取りにくるようになっていたので、思い切って声をかけてみることにした。学習終了後、ロビーで迎えを待つ純くんに文集のことを話すとやや硬めの表情ではあるものの、わずかに笑顔を交えて了解してくれた。その「変化にびっくり」とすると共に、「確実に変わってきていることがうれしかった」(活動記録2009年2月2日)。

それから2週間後、純くんは上階にある別室

での個別学習をやめて、メインの会場に移ってきた。男子学生から「そろそろ降りてみても大丈夫じゃないって言われて。そっか、みたいな」。実際に、メインの会場に合流してみると「たいして変わらなかった」という。

2 きっかけは「仮面ライダー」

このわずか半年の間に何があったのか。実は、純くんによると、男子学生とはペアを組んでから比較的早い段階から話すようになっていたという。きっかけは「仮面ライダー」だった。まだ母親同伴で参加していた頃、男子学生からいきなり、「仮面ライダーって知ってる？」と尋ねられた。「ヒーロー物の特撮」が好きだった男子学生は、ゲームやアニメが好きな純くんならば、当時テレビ放映していた「仮面ライダー・ディケイド」を観ているかもしれないと考え、そこに純くんとの接点を試みたのだろう。

「いきなりなんだこいつ。バカか」—純くんは当時の心境を笑ってそう話す。男子学生の思惑は空振りに終わったかに思えたが、母親が二人の会話を聞いて番組を録画していた。母親の薦めで、観てみると「子ども向けでなくて面白かった」。結果、「兄もはまって、家族で観るようになった」。男子学生は、毎週具体的な感想を求めるので、必然的に純くんのことは数は増えるようになっていった。

夏が終わりになる頃、ふたりは劇場版「仮面ライダー」を一緒に観に行く計画を立てる。男子学生は現地集合を提案した。男子学生から純くんの母親に車で送り迎えはしないようにとのお願いがあった。自転車に乗ることができない純くんは、バスを利用せざるを得ない。しかし、当時、純くんは一人でバスに乗ることができなかった。路線もわからなかったし、整理券や料金表の見方も知らなかったからだ。

男子学生は当然それを知っていた。純くんの

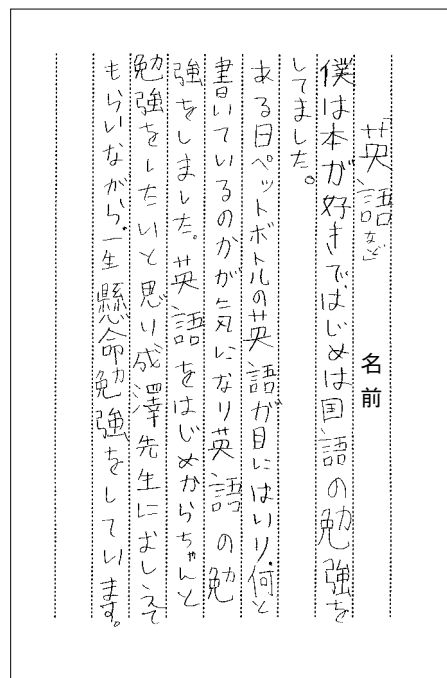
生活世界は、地理的には自宅周辺の徒歩圏内、関係的には家族とごく限られた知人のみであった。外出するといえば、近所の本屋で立ち読みするくらい。仮に目当ての本が見つからなくても店員さんに尋ねることはしなかった。話しかけるのが「面倒だったから」。自分で探し回っても、見つからないときは、「ないものとして、あきらめていた」。今回のチャレンジが、そうした日常に風穴を開ける契機になるかもしれない。そんな男子学生の願いが込められていたのである。

純くんは、予行練習をして当日に備えることにした。本番と同じ行程を事前に一人で挑戦してみたのである。ところが、である。到着地は、予定していた映画館のあるショッピングセンターとは違うように見える。路線を乗り間違えたかもしれない。「聞くしかないんで、しょうがなく」運転手に話かけてみると、やはり別のショッピングセンターだった。運転手に自宅付近に向かうバス路線を教えてもらい、その日はそれで終了した。予行練習のかがあって、当日は無事にバスを利用して現地集合できたという。「失敗」を乗り越えての「成功」は、自信になっただろう。

さらに、この経験は純くんの生活を変えていく。困ったときに誰かに頼ること、尋ねることはそれほど「面倒」なことではないと感じるようになった。欲しい商品が見つからない時には店員さんに尋ねるようになったという。

3 1年目後半から2年目前半 ―「できる自分」を取り戻す―

2年目の文集を見て欲しい(資料3)。まず、文字が劇的に変化している。純くん自身、「整っている」「字が濃くなった」と評するように、全体的に文字が大ぶりになっており、直線もきちんと書けている。1年目の文字(資料2)は線が弱々しく、直線がうまく引けていない。しっ



資料3 文集第2集

かりした線を書くためには、えんぴつを正しく握り、筆圧を適度に調整することを習得しなければならない。

こうした変化は、自然に訪れたわけではない。自宅で「漢字をやたらしてた」結果であった。毎日2時間、2～3ヶ月でノート1冊を終えるほどの学習量を続けていたのである。きっかけは、男子学生が作成した漢字テストだった。せっかく自分のために手作りで用意してくれたので、「しょうがないからやるか」と取り組んでみたものの、「出来はあまりよくなかった」。そこから一念発起して、漢字の猛勉強をはじめたという。その後、再び男子学生からテストがあったが、結果は「わりによかった」。文集の本文中に「本が好き」とあるが、純くんはライトノベルというジャンルの物語小説を好んで読んでいる。漢字を勉強したいという動機のひとつは、そこからきていたのかもしれない。

この時期に、他に印象的なエピソードはないか尋ねたところ、「くるかい」で使用している

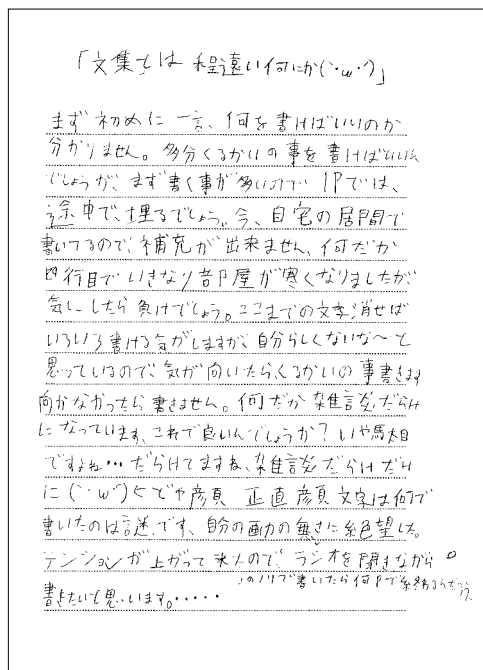
長机を一人で運べるようになったと述べた。この変化も、自然に筋肉がついたわけではなく、理由があった。「くるかい」の活動中に「筋トレ」をしていたという。「勉強していたら、いきなり〇〇（男子学生、呼び捨て）から腹筋できる？って言われて（笑）」。やってみると腕立ては数回しか、腹筋にいたっては1回もできない。一日のほとんどを自宅で過ごしていたので、運動らしい運動はほとんどしていなかった。そこから数ヶ月間、「くるかい」だけでなく自宅でも「筋トレ」が日課となった。できる回数は目に見えて伸びてきた。この時期、漢字学習と並行して「筋トレ」を行っていたことも、純くんの「できる自分」への信頼を回復していくことを後押ししたのかもしれない。

漢字学習がひと段落ついた頃、純くんは「ペットボトルの英語が目に入り、何を書いているのか気になり英語の勉強をし」はじめたと文集に綴っている。インタビューによると、加えて、友人の薦めで聞いたロックバンドの歌詞にある英語のフレーズの意味を知りたいと思ったのも要因だったという。いずれにせよ、英語の学習ニーズは、実生活から立ち上がったものだった。中学校に一日も通っていないので、アルファベットからはじめた。

英語の学習は、主に女子大学生が担当した。男子学生も傍らに座ることが多かったが、男子学生が休みの場合もあった。学習開始時は、やはりどこかぎこちない感じだったが、終了時には和やかな雰囲気になっていた（筆者による活動記録2010年9月1日）。

4 2年目後半から3年目前半 —世界を応答的なものへと書き換える—

3年目の文集には、『『文集』とはほど遠い何か（`ω´）という』タイトルで、4頁にもわたる長文を寄稿した（資料4）。本文中に「3時間ぶっとおして書いた」とあるが、長時間の



資料4 文集第3集

執筆に耐えられる身体を獲得していることを意味している。

本文の内容は、「くるかい」に来てからの自分自身について、作文を書いている最中の周囲の環境や自身の思考の過程を実況中継風に盛り込んだものとなっている。「何だか四行目でいきなり部屋が寒くなってきた」、「テンションが上がって来たのでラジオを聞きながら書きたいと思います……このノリで書いたら何Pで終わるんだろう」といったような表現が見られるが、これは高度なりテラシーの運用能力を必要とする。書きながら思考する、あるいは思考をその場で文字化するという行為は、文字を書くのが精一杯という段階では成立しない。書くという行為を意識しなくても遂行可能なほどに、書くという行為を自分のものにできてはじめて成立するものである。

さらに、スタッフとの関係性について、冗談を交えながら書かれていることにも注目したい。まず、この表現は、本文で登場するスタッ

フたちの好意的な反応を予期して書かれたものである。さらに、私信ではなく文集である以上、そうした純くんをとりまく関係性の描写を微笑みながら受け止めてくれる読者を想定して書かれたものといえる。「くるかい」のスタッフという親密な他者との関係性を軸にしながら、他者全般、そして、その先にある社会への信頼を取り戻しつつあることが伺える。

作文に「いろいろ書くと10Pいきそうですね」とあるが、この時期は純くんにとって、いろいろなことに挑戦した一年だった。一つ目は、「くるかい」の年中行事として開催した湖を散策して、その後にバーベキューを食べる交流活動への参加である。草花に詳しいスタッフが解説しながら、一周3キロほどの湖の周りを約1時間かけて散策していったが、純くんはというと、初夏の陽気の中、歩いていること自体が楽しいようだった。母親も一緒に参加したが、ほとんど別行動で、純くんは先に先に歩いていた。一足先に散策を終えた純くんは、集合場所付近の林の中や小道を探索していた。その後のバーベキューでは、時折、男子学生以外のスタッフともことばを交わす姿があった。スタッフのお孫さんの子守を頼まれ、どう対応してよいか戸惑いながらも後ろを付いて歩いていた。

二つ目は、それから1ヶ月後に、有志参加の雌阿寒岳登山があった。彼にとっては、人生初の登山。前回の湖散策を腕試しとウォームアップの機会と考えていたのかもしれない。今回は母親の参加はなく、純くん単独参加である。登山は何十年振りといった参加者もいたので、ゆっくり時間をかけながら、無理をせずに登っていった。登山経験者なら頂上まで2時間半のコースだが、五合目ですでに4時間近く経過していた。当初から想定はしていたことなので、そこで昼食をとり下山した。純くんはというと、まだまだ元気な様子で、全体のペースにあわせ

つつも、先へ先へと軽やかに下っていく。足元には木の根や石ころがごろごろしている。それらを自分の意思で身体を動かしながらかわしていくのが楽しい、そんな様子だった。下山後、麓の温泉で入浴し帰路についた。後日、登山についての感想を尋ねたところ、「歩けば前に進むところが楽しい」という答えだった。

この登山がきっかけで、純くんの生活はまた少し広がっていく。「歩くのって楽しい」「木ってきれいだな」と感じたので、自宅付近を散歩するようになった。自転車に乗ることができなかった純くんは、「あまり外出しようとはしなかった」。散歩を続けていくうちに歩く距離が増え、自宅から離れたところまで足を延ばすようになった。これまで「あまりまじまじと見ることがなかった」身近な景色は、「案外きれい」だった。このことは、単に景色を楽しみながらの散歩が日課になったということに留まらない。それは、純くんと世界との距離が変わったことを意味する。意識的に世界と関わろうとすると、これまで疎遠だった世界が、彼に語りかけてくる。

三つ目は、この年の秋、ベアの男子学生と一緒に特別講義の講師を務めたことである。「くるかい」では外部講師を招いたり、内部で講師役を務めたりして、特別講義と称した学習活動を年数回設けている。その一環として、男子学生が海外を旅してきた様子を報告することになり、純くんもサポート役として登壇することになった。当日は50名を超える聴衆を前に、漫才さながらの軽快な「つつこみ」を入れて話に花を添えていた。

実は、ふたりはこれに向けて時間をかけて準備してきた。当初は純くんの役割はパソコン操作の補助というはずだったが、いつの間にか一緒に登壇することに「なってしまった」。男子学生が純くんの自宅を訪れ、「作戦会議」を開

いて、どういう構成にするか、写真を選び、スライドを作成する作業を一緒に行った。予行練習も数回行った。二人三脚で準備を重ねて臨んだ特別講義当日。結果は、拍手喝采だった。「よかったよ」と直接声をかけてくれた人もいた。純くんのスタート時を知るスタッフの誰もが、彼の変化に驚き、喜び、励まされていた様子で、ふたりの頑張りを称えていた。余談だが、その準備の過程で純くんはコーヒーが飲めるようになったという。男子学生が「紅茶がなかったんでこれ」と差し入れとして持参してきたのがきっかけだった。

四つ目は、赤い羽根募金の街頭活動への参加である。特別講義を担当してしばらくした頃、「くるかい」経由で赤い羽根募金の街頭活動のボランティアの募集があった。毎週会場を無償提供してもらっている釧路市社会福祉協議会からの依頼ということもあり、「くるかい」としても参加者なしというのは避けたかった。その旨も含めて、全体に呼びかけたところ名乗りをあげてくれたのだが、純くんたちのペアだった。しかし、実際は、男子学生が「おれたちも出ます」と手を挙げ、純くんは「(おれ) たち!」と思いながらも、「一緒に行くから」と説得されて参加を決意したのだという。

しかし、当日、男子学生は「途中で用事があるとかでいなくなった」。募金活動には、他にも「くるかい」から数名の参加があった。かつての純くんだったら、男子学生は、純くんひとりを残して退席するということはしなかっただろう。大学三年時に純くんと出会い、大学院進学後も継続して純くんの担当だった男子学生は、春が来れば大学院修了と共に釧路を離れることが決定していた。今の純くんだったら、自分がいなくても大丈夫だという思いと願いを込めての行動だったのだろう。実際、純くんはひとりでも大丈夫だった。「せっかくだからいよ

うかな」と最後まで募金活動をやり遂げた。

以上のように、純くんにとってこの1年は、世界とは自らの働きかけに応じて拡張されていくものであることを体感する出来事に彩られていた。応答的なものとして世界が書き換えることで、純くんと実社会との距離は急速に縮められていく。

5 3年目後半以降とこれから —拡張していく世界を楽しむ—

高校進学を考えはじめた時期は、参加3年目の秋頃に遡る。アルバイトをはじめようと求人票を見てみると募集のほとんどが高卒以上だったので、「高校いつとか」と思った。母親のほかに、男子学生や小学校時代の校長に相談した。そうした中で、定時制高校や通信制高校という選択肢を知る。自分でインターネットを使っていくつか候補を検索し、資料請求した結果「ここならいいかな」と思える通信制高校への進学を決意する。

しかし、すでに募集期間を過ぎていたので春まで待つことになった。それが「かえってよかった」。中学校の英語や数学の復習をする時間が十分にとれたおかげで、通信制高校の学習内容にスムーズに移行できたのだという。この頃になると「くるかい」のペア学習は、男子学生から女子学生へと主担当を完全に交代していた。高校進学という明確な目標があったので、女子学生との学習は「集中していた」。

そして、冒頭で紹介した4年目の文集(資料5)である。去年の作文を読み返して、「今年は絶対まじめに書こうと思った」。「後で読み返せるようなもの」にしたかったからだという。3年目の文集についても、実は事前にノートに下書きをし、提出稿はそれを清書したものだ。昨年度も作業的には十分に「まじめ」に取り組んでいる。したがって、ここでいう「まじめ」とは、中身についてのことだろう。

「一年を振り返って」

僕はこの一年を振り返って色々な事が

あったなと思います。

通信制の高校に通ったり、バイトしてい

たらいつのまにか一年経っていました。

その一年で僕が変わった事は、自分に自信が

付いたりバイトで体力が付きました。

それ以外にも色々あるとは思っていますが、ほんと

思いつくのはこれ位です。

今の僕は一年後の僕の成長を見るのが

楽しみです。

名 前

資料5 文集第4集

僕はこの一年を振り返って色々なことがあったなと思います。

通信制の高校に通ったり、バイトをしったりしたらいつのまにか、一年経っていました（笑）。

その一年で僕が変わった事は、自分に自信が付いたり、バイトで体力が付きました。

それ以外にも色々あると思うんですが、パッと思いつくのはこれ位です。

今の僕は、一年後の僕の成長を見るのが楽しみです。

誰に向けた文章だったのかと尋ねたところ、自分自身に宛てたものだと答えた。簡潔ながらもしっかりした文章構造で、これまでの自分の努力と成長を認め、これからの自分への期待を丁寧な文字に刻んでいる。

加えて、この文章は、男子学生に向けて書かれたものであったと筆者は推測する。男子学生は筆者に1通のメールを嬉しそうに見せてくれたことがある。純くんが男子学生宛てに送った「まじめ」なメールだった。そこには、今の自

分があるのは、あなたがいてくれたからという趣旨で感謝の気持ちがストレートに綴られていた。純くんは、そうした気持ちを公の場で示したかったのではないかと。純くんの傍らに常に男子学生がいたことは、「くるかい」の誰もが知るところである。

この文章が書かれた頃、男子学生は将来への不安等から非常に揺れていた。あらゆることに対して自信がもてず、ネガティブな評価をしてしまいがちな状態で、「くるかい」も大学も辞めたいと筆者に相談するほどだった。そんな男子学生へのエールの意味を込めて、あの文章は書かれたのではないかと。未来に希望を語る自分を公言することは、すなわち、男子学生の功績を称え、「私たち」の歩みを「くるかい」の記憶に刻むことでもある。純くんは、文集を通じて男子学生にもっと自分に自信をもってほしい、あなたの存在意義は私自身が示している、そう伝えなかったのではないかと。

毎年文集は、「くるかい」の修了式に渡すことになっているが、結局その席上に男子学生は姿を見せなかった。修了証書をもって一言。「通信制高校に通うんで、〇〇（男子学生の名前、呼び捨て）も草場の影から応援してくれると思います」と会場を笑わせた。男子学生との別れについて、「これで最後って思わなかった」と語る。今現在でも男子学生とは時々メールのやりとりがあるという。

純くんに関心について尋ねたところ、「とりあえずバイトを探さないと」いけないと考えている。これまで勤めていた厨房補助のアルバイトは、経営不振からスタッフ数が余剰になってきたために勤務日数が減らされ、給与の支払いも遅れがちだったので辞めることにした。「将来のためになりそうなのでコンビニとかの接客」の仕事をしたいが、「選んでる場合じゃないので何でもする」。あえて苦手な人と接する

機会の多い仕事を経験したいというこの発言は、今の自分ならどんな仕事でもやり遂げることができるだろうという自信に裏打ちされたものである。

長期的には、「海外に一人旅に行きたい」。特別講義を男子学生と一緒につくる過程で、「自分も海外を観てまわりたいと思った」。とくに理由はないがロンドンを訪れたいという。学んだ英語を活かせる国ということが頭をよぎったのかもしれない。筆者から、まずは国内で経験を積んでみるのもよいかもしれないので、旅好きの現在大学4年生のスタッフ（前述の男子学生、女子学生とは別）に尋ねることを薦めた。その学生スタッフは、趣味の自転車旅行の楽しさについても話した。純くんは自転車に乗れないことを伝えと、後日、その学生スタッフとふたりで練習することになった。数時間の練習で、純くんはすぐにコツを掴んだという。この秋、ふたりで自転車旅行を実行することが決まっている。新しいことに挑戦することで、世界が広がることを楽しむ姿がそこにはある。

4 まとめにかえて

純くんは、男子学生と共に新しい挑戦をやり遂げていくことで「できる自分」を取り戻し、自分自身と他者への信頼を確かなものにしていった。そして、それは同時に、世界とは自らの働きかけに応じて拡張されていくものであることを体感するプロセスでもあった。世界が応答的なものであると認識されることで、純くんの生活世界と実社会との距離は縮まっていった。高校進学やアルバイトは、実社会を生きる決意の現れといえよう。

本稿を通して見えてきたことは、学び直し支援について考える際、リテラシーの運用能力を「適正值」に引き上げるという発想では不十分

だという事実である。純くんにとって学び直しとは、リテラシーの再習得支援を媒介にした関係の編み直しであったといえる⁽⁸⁾。まず、「私」（自分自身）への信頼を編み直すことから始まり、「私」と他者、「私」と社会、そして、それらと関係をもちながら生きる「私」を再獲得していくプロセスであった。リテラシーの再習得支援は、そうした関係性の編み直しを促した一方で、編み直された関係性がその変化に対応するようなリテラシーの運用能力を再帰的に求めていく。

参加当初、純くんは自宅の住所を漢字で書けなかった。このことは、リテラシー運用能力の数値的な「低さ」として理解するのではなく、「彼が生きる世界のあり様」と「彼の生活世界と実社会との距離」を示すものとして理解すべきである。実際、彼はライトノベルというジャンルの物語小説を好んで読んでいた。わからない漢字は、携帯電話からインターネットで調べていたという。学校学力的には不登校になった小学校3年生レベルで留まっていたが、自らの生活にとって必要なことは、自ら学習していたという事実は見逃せない。

純くんの生活を構成するものとして、読むという行為は位置づいていたが、書くという行為はそうではなかった。彼の書く能力の「低さ」とは、彼が生きる世界のあり様を実社会側から眺めた一つの景色に過ぎない。おそらく、われわれが思うほどには、当時の純くんは「書けない」ということに不自由さを感じていなかったのかもしれない。なぜならば、彼の生活自体がそうしたものとして構成されていたからである。こうした理解に立つと、バスの乗り方がわからない、店員さんに話しかけることができないということも、社会性やコミュニケーション能力の「低さ」ではなく、彼が生きる世界のあり様とそこに規定された行動様式の現れとして

理解できる。

しかし、われわれ人間は社会的動物であるがゆえに、実社会と完全に乖離した生活世界は存立しづらい。学び直し支援におけるリテラシーの問題はそこにある。問われるべきは、リテラシーの運用能力の多寡ではなく、当人の生活世界と実社会との距離にある。そして、支援実践においては、両者の距離をどのように縮めていくかが重要になる。

純くんのケースにおいて、きっかけは「仮面ライダー」であった。純くんと男子学生は「仮面ライダー」を会話の糸口にしながら、会話を重ね、互いの信頼関係を築いていった。そうしたふたりの関係性を基盤として、他者全般や実社会との接点を模索していく。それは、純くんの生活世界と実社会とが互いに中心部に向けて引きあうことで、両者の重なる部分が徐々に増えていくような働きかけであったといえる。実社会側を不動のものとして捉えず、当人にとって意味のあるように見え方や関わり方を加工することで、実社会側からも彼の世界に歩みよるように「調整」あるいは「翻訳」する支援者の姿がそこにはある。

その際、両者の距離をどのペースで、どの程度までつめていくかの最終的な決定権は、常に純くんにあったことも大きな特徴である。働きかけはする。半ば強引に。だけでも、それは

NOと言える関係性に裏打ちされたものであった。たとえ、変わらなくてもよい。今のままでも十分だ。大切なのは、あなたがここにいてくれること。生活世界を大きく変えていく一步は、立ち止まること、変わらなくてもよいという選択肢が実質的に担保されてこそ、踏み出せるのではないだろうか。純くんと男子学生は互いを呼び捨てで呼びあう。

インタビュー時、純くんは、男子学生の話題になるとことば数が増え楽しそうに話す。他方、男子学生も悩みや迷いを抱えていた時期だけに、純くんの存在は大きかったといえる。

このことは、なぜ学ぶのか、何を学ぶのかということに先立って、誰とどう学ぶのかが重要な場合もあることを示唆している。男子学生の用意した漢字テストだったからこそ、純くんは、「やたら勉強した」のではないか。学び直し支援を関係性の変容に向けた学びとして理解するならば、支援者個人のパーソナリティや専門性もさることながら、被支援者の関係性の網の目に意味ある他者として根付くことがまず支援者として求められてくる。実社会と乖離した生活を長らく送ってきた若者にとって、学ぶ意味とは所与のものとしてあるのではなく、互いにかげえのなさを体感しあう関係を基盤として、当人を取り巻く支援者や仲間と共に創りだしていくものだといえる。

注

- (1)本稿において、夜間中学という用語は公立夜間中学校に加えて自主夜間中学を含めたものとして使用する。なお、自主夜間中学とは、公立夜間中学校との対比を意識した用語で、市民によるボランティアな学び直し支援実践のことをさす。公立夜間中学校は25校、自主夜間中学校は27団体である（全国夜間中学校研究会2012）。
- (2)たとえば、松崎（1997）、松戸市に夜間中学校をつく

る市民の会編（2003）等

- (3)歴史的には、公立夜間中学校は、勤労青年の学習権保障として展開してきた。その意味で、この分野において若者への学び直し支援は古くて新しい課題といえる。
- (4)矢守（2010）は、普遍的な妥当性をもつ真理・法則性を「正解」、特定の現場において当面、成立可能で受容可能な解を「成解」と区別する。今この現場において受容されない解も、他の現場における「成解」

である可能性を否定できない。つまり、「他の現場における『成解』や、過去における『成解』は、今この現場の未来における『成解』の候補として位置づける」(23頁)。

- (5)「くるかい」に参加していた若者の中には、当人も周囲も変化や成果を感じることができないままに去っていったケースも少なくない。だからこそ、純くんのケースを「くるかい」としての到達点のひとつとして考えたい。
- (6)筆者にとって、純くんへの聞き取りは支援実践の延長線上として位置づくものであった。したがって、筆者は、純くんの「今」を賞賛すべき到達点として全面的に肯定しつつ、不登校時代の「傷」には極力触れずに、「これから」につながるような「事実」の発見に努め、肯定的な価値づけにつながることを意識的に用いていた。純くんの「今」につながる背景を知るにつれて、筆者は感動と嬉しさがこみあげてきた。
- (7)「くるかい」の規約上、学齢期の純くんは即時入会というわけにはいかなかった。形式的には「見学」という扱いで、学習に参加してもらい、中学校卒業(実際には一度も登校していない)を待って正式に入会してもらった。
- (8)考察部は、筆者がこれまで出会った実践者や研究者

との交流から示唆を得ている(文献含む)。それらの先行する知見との相違点については、別の機会に詳しく論じたい。

引用・参考文献

- 井上大樹(2011)「夜間中学における若者支援」『北方圏学術情報センター年報』第3号。
- 岩崎真理(2008)「夜間中学における識字教育－在日朝鮮女性一世の「経験」に焦点を当てて」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊16-1。
- 松戸市に夜間中学校をつくる市民の会編(2003)『松戸自主夜間中学校の20年』勁草書房。
- 松崎運之助(1997)『幸せになるための学校』ひとなるブックレット。
- 添田祥史(2008)「親密圏としての識字実践」『飛梅論集』九州大学大学院人間環境学府・教育学コース院生論文集。
- 添田祥史(2012)「釧路市における格差・貧困問題と成人基礎教育－釧路自主夜間中学『くるかい』の現場から」『教育学の研究と実践』第7号、北海道教育学会。
- 上杉孝實(2013)「欧米の成人基礎教育と日本の社会教育」『部落解放研究』No.199(近刊)。
- 全国夜間中学校研究会(2012)『第58回全国夜間中学校研究大会大会資料』。